

—— Let's embark on a journey to discover our own “perspective on the Lotus Sutra”！

(みんなで“法華経観”を見つける旅に出よう)

かんぜおんぼさつふもんぼん
『妙法蓮華経 観世音菩薩普門品 第二十五』 (本門・流通分) ほんもん るつうぶん

○『又如来の滅度の後に、若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も随喜せん者』
また めつど のち も ないしいちげ いっく き いちねん ずいき もの

には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 (法師品 二〇二頁 終五行)
われまたあ のくた らさんみやくさんぼだい き あた さず

○『其の習學せざる者は 此れを曉了すること能わじ』 (方便品 八十二頁 四行)
そ しゅうがく もの こ ぎょうりょう あた

○「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」
もんげ しゆい しゅうしゅう

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ』 (法師品 二〇九頁 三行)
ももんげ しゆい しゅうしゅう え かなら あのかた らさんみやくさんぼだい ちか え

○『十分の一でも実践できれば、また一つでも徹することができれば、立派な精進』



<観世音菩薩普門品のあらすじ>

【無尽意(むじん)に菩薩が釈尊に、観世音菩薩の「名前の由来」をお尋ねする】——

【三五七頁 一行】釈迦牟尼世尊が理想と現実について説いた妙音菩薩の説話を語り終えると、無尽意(むじん)に菩薩が法座から立ち上がり、右の肩をあらわにして(古代インドの風習 / 相手を讃嘆し敬意を表す作法)、そして仏さまに合掌をして次のように申し上げました。

【三五七頁 二行】/【偈】三六三頁 終二行】『世尊、観世音菩薩は何(なん)の因縁を以てか観世音と名(なづ)くる』

「世尊よ。観世音菩薩は、なぜ『観世音』というお名前が付けられたのでしょうか。そのいわれをお教えてください」

【釈尊が無尽意菩薩の質問に答える】——

【三五七頁 三行】/【偈】三六四頁 一行すると釈尊は、無尽意(むじん)に菩薩にお答えになりました。

「もし無量百千万億という無数の衆生が、さまざまな苦悩を受けることがあっても、観世音菩薩の偉大さを信受して / (『即時(そくじ)に其(そ)の音聲(おんじょう)を觀じて、皆解脱することを得せしめん』) 一心にその名前を称(とな)えれば、観世音菩薩は即座にその『声』を聞き取り、全ての苦悩から解き放たせて、救いを与えます。それゆえ『観世音』と名付けられたのです」

【観世音菩薩の無限の慈悲と一体となれば、『七難』から救われる】——

【三五七頁 終五行】**釈尊**は説かれます。「もし、この『観世音菩薩』の名をしっかりと心に保つ『観世音菩薩普門品』で説く「一切をありのままにとらえて、相手と一体となる」という教えを実践する)ならば、／❶《火難・煩惱の炎》『設(たと)い大火(だいか)に入(い)るとも火も焼(や)くこと能(あた)わじ』大火(たいか)の中にあっても、その人を焼くことはできません。(煩惱・怒りに溺れることはない)／【(偈)三六四頁 四行】『大(おお)いなる火坑(かきょう)に推(お)し落されんに〜火坑(かきょう)變(へん)じて池と成らん』また火口のような火の穴に落とされても、観世音菩薩の救済力を一心に念ずるならば、その火の穴はたちまちに涼しい池となります。／❷《水難・欲に溺れる》【三五七頁 終四行】『若(も)し大水(だिस水)に漂わされんに〜即(すなわ)ち淺(あさ)き處(ところ)を得ん』もし大洪水で押し流されることがあっても、観世音菩薩が持つ偉大な神通力ゆえに、自然と浅瀬(あさせ)に着いて助かります。【(偈)三六四頁 六行】『或(あるい)は巨海(こかい)に漂流(ひょうりゅう)して〜波浪(はろう)も没(もつ)すること能(あた)わじ』大海原(おおうなばら)で漂流し、竜や猛魚(もうぎょ)や鬼などから襲(おそ)われることがあっても、観世音菩薩の力を念ずるならば、波にのまれず難を免(まぬか)れます。(欲に溺れることはない)／❸《風難・人生の目的を見失う》【三五七頁 終三行】『若(も)し百千萬億の衆生あつて〜假使(たとい)黒風(こくふう)其(そ)の船舫(せんぼう)を吹いて、羅刹鬼(らせつぎ)の國に飄墮(ひょうだ)せん〜羅刹(らせつ)の難を解脱することを得ん』もし、百千万億という人々が金・銀・瑠璃(るり・青紫色の宝石)・磲磈(しゃこ・貝の一種 またはサンゴ)・碼瑙(めう・エメラルド)・珊瑚(さんご)・琥珀(こはく)・真珠等の貴金属を求めて大海(たいかい)に乗り出して行ったとしましょう。その時、にわかに暴風が吹き起り、船が押し流されて悪鬼の羅刹(らせつ)が棲(す)む國に漂着することがあっても、一行のなかで『観世音菩薩』の名を称(とな)える者が一人でもいるならば、全員、悪鬼に害されず、事なきを得ます。それ故、『観世音』と名付けられたのであります。(人生の目的を見失って、悩み迷うことはない)／❹《災難・心を切られる、憎悪・ぞうお、嫉妬・しつと、侮辱・ぶじょくの難》【三五八頁 三行】『若(も)し復(また)人あつて當(まさ)に害せらるべきに臨(のぞ)んで〜彼(か)の執(と)れる所の刀杖(とうじょう)、尋(つ)いで段段(だんだん)に壞(お)れて、解脱することを得ん』またある人が暴行を受けようとする時に、『観世音菩薩』の名を称(とな)えるならば、振りかざした杖や刀もバラバラに砕けてその難から逃れることができます。(嫉妬や憎悪に身をやつすことはない)／❺《鬼難・自分自身を見失う》【三五八頁 四行】『若(も)し三千大千國土に中に滿(み)てる夜叉(やしや)・羅刹(らせつ)〜況(いわ)んや復(また)害を加えんや』もし、三千大千國土というすべての世界に夜叉(やしや)や羅刹(らせつ)などの悪鬼が充満し、それらが人々を悩乱(のうらん)させようとやって来ても、『観世音菩薩』の名を称(とな)えるならば、悪鬼たちは人々を不幸にしようという心が起きず、害を加えることができなくなります。(自分自身を見失い、前後不覚にならない)／❻《獄難・心の自由を失う》(※ゆめゆめ間違って解釈してはならないのは、罪を犯した罪人が、無罪となって釈放されると解してはいけません)【三五八頁 終五行】『設(たと)い復(また)人あつて若(も)しは罪あり〜皆悉(ことごと)く斷壞(だんね)して、即(すなわ)ち解脱することを得ん』ある人が罪を犯し、あるいは無実の罪によって手かせ・足かせをはめられ、拘束(こうそく)される身となったとしましょう。しかしその人が『観世音菩薩』の名を称(とな)えるならば、その拘束(こうそく)している器具はバラバラに壊(こ)われ、即座に自由の身となります。(物事に捉われ、執着することはない)／❼《賊難・人生に起こる様々な苦難》【三五八頁 終四行】『若(も)し三千大千國土〜怨賊(おんぞく)あらんに、〜此の怨賊(おんぞく)に於て

當(まさ)に解脱(げだつ)することを得(う)べし』もし、三千大千国土という世界の中で、凶悪な賊(そく)や極悪人(ごくあくにん)が国中に充満していたとしましょう。そこに一人の商人が大量の宝を運ぶ隊列を率(ひき)いて、悪路(あくろ)を通り抜けようとしてしました。その時、隊列の中の一人がみんなに向かって次のように言いました。『皆さん。恐れることはありません。一心に観世音菩薩の名を称(とな)えなさい。観世音菩薩は衆生に恐れを無くするように導く菩薩ですから、皆さんが『南無観世音菩薩』と称(とな)えれば、必ず盗賊の難から逃れられます』と言ったのでした。すると全員が声を合わせて『南無観世音菩薩』と称(とな)え、一行は盗賊に遭遇(そうぐう)することはありませんでした(様々な変化に動じない。泰然示寂/たいぜんじやくとしていいることができる)」

【三五九頁 四行】『無盡意(むじんに)、観世音菩薩摩訶薩は威神(いじん)の力巍巍(ちからぎぎ)たることは是(かく)の如し』「無盡意(むじんに)菩薩よ。観世音菩薩の感化力と神通力の高さや偉大さは、以上のように人々を【七難(しちなん)】から救う素晴らしい力なのです」

【観世音菩薩の慈悲と一体となれば、『三毒(貪・瞋・痴)』から解脱(げだつ)できる】——

【三五九頁 五行】さらに釈尊は説かれます。❶『貪・とん/貪(むさぼる)欲』「もし、性欲に溺(おぼ)れる人がいて、その人が常に『観世音菩薩』を念じて敬う(『観世音菩薩普門品』で説かれている教え/一切をありのままにとらえて、相手と一体となる)ならば、ひとりでにその欲が心から離れて行き、苦しむことは無くなります」

❷『瞋・じん/怒りの苦しみ』「また、いつも怒り、それによって自他共に苦しませる人がいたならば、その人が『観世音菩薩』を常に敬っていると、その人はその怒りの苦しみから解き放たれ、すぐに怒るという悪癖(あくへき)から離れることができます」

❸『痴・ち/本能の赴(おもむく)ままに振る舞う愚かさ』「もし、智慧に乏(とほ)しいために愚痴(ぐち)を口にすることが多く、本能の赴(おもむく)ままに行動を起こすような人がいたならば、その人が常に『観世音菩薩』を敬う心を持ち続けると、真理を知ることによって自らの愚かさに気づくことができます。そして本能の衝動(しょうどう)に駆(か)けられることがなくなり、その人の心は常に平静を保ちつづけることができ、様々な欲望を自然に抑(おさ)えていくことができます」

【三五九頁 終五行】『無盡意(むじんに)、観世音菩薩は是(かく)の如き等の大威神力(だいゐじんりき)あって、饒益(にょうやく)する所多し』「無盡意(むじんに)よ。観世音菩薩は偉大な感化力と神通力を持ち、衆生に豊かな利益(りやく)を与え、【三毒(貪・瞋・痴)】から解脱(げだつ)させます。ですから衆生は『観世音菩薩』を常に念ずることが必要なのです」

【観世音菩薩の慈悲と一体となれば、『二求両願(にぐりょうがん)』を得る】——

【三五九頁 終三行】❶『男は智慧・福德』『若(も)し女人(にょにん)あつて設(たと)い男(なん)を求めんと欲し、観世音菩薩を禮拜(らいはい)し供養せば』「もし男の子が欲しいと願う婦人が一心に『観世音菩薩』を礼拝し供養するならば、『便(すなわ)ち福德・智慧の男(なん)を生まん』必ず福德円満(ふくとくえんまん/人との和を保ち、穏やかで)・豊かな人格・感化力・智慧を具えた立派な男子を産むでしょう。

❷『女は慈悲・端正・愛敬』もし女の子が欲しいと願うならば、『便(すなわ)ち端正有相」

〔たんじょう うそう〕の女(にょ)の宿(むかし)徳本(とくほん)を植えて衆人(しゅにん)に愛敬(あいきょう)せらるるを生まん〕
顔立ちや身なりが整い、そして前世において積んだ徳分によって多くの人々から愛され敬われ、慈悲深い女子を生むであります。

——『二求両願・にぐりょうがん』（「智慧」と「慈悲」の二徳を求める）

【三五九頁 終行】〔無盡意(むじんに)、觀世音菩薩は是(かく)の如き力あり。～福唐捐(ふくとうえん)ならじ〕
「無盡意(むじんに)よ。觀世音菩薩にはこのような力があるのです。もし人々が觀世音菩薩を敬い・礼拝するならば、その利益と福は必ずあります。ですから皆さんは、觀世音菩薩の無限な大慈悲と一体となれるよう、觀世音菩薩の名をしっかりと唱えなければなりません」

【觀世音菩薩の慈悲と一体となることの功德と、その大きさについて】——

【三六〇頁 二行】釈尊は説かれます。「無盡意よ。もし、ある人がガンジス河の砂の数の六十二億倍の数の菩薩を敬い、一生、供養し続けたとしましょう。そなたはどう思いますか。その善男子・善女人が受ける功德は多いと思いますか」

【三六〇頁 四行】無盡意(むじんに)菩薩が答えました。
「世尊よ。もちろん、非常に多いと思います」

【三六〇頁 五行】釈尊が言われました。「その通りです。無盡意よ。ここに二人がいて、ひとりには『觀世音菩薩』の名を称(とな)えてしっかりと心に保ち続け、もう一人が一時(いっとき)の間で『觀世音菩薩』を礼拝・供養(『觀世音菩薩普門品』で説く「一切をありのままにとらえて、相手と一体となる」という教えを實踐)したとしましょう。／〔是(こ)の二人(ににん)の福、正等(しょうとう)にして異(ことな)ることなけん〕しかしこの二人が得る功德には違いがなく等しいものです。その功德の甚大(じんたい)さは、百千万億劫(こ)という無限の時間を要しても説明し尽くすことができません。無盡意よ。『觀世音菩薩を恭敬(くぎょう)すると、／〔是(か)くの如き無量無邊の福德(ふくとく)の利を得ん〕」無量無辺という計り知れない福德を得ることができるのです」

【觀世音菩薩の救済力・方便力について、無盡意菩薩が質問する】——

【三六〇頁 終四行】そこで無盡意(むじんに)菩薩が仏さまにお尋ねしました。

「世尊よ。觀世音菩薩はどのようにして娑婆(しゃば)世界に自由自在に出現し、人々に自由自在に法を説き、そしてどんな方便力を示すのでしょうか」

【釈尊のお答え。—— 觀世音菩薩は『三十三身』を現ずる】——

【三六〇頁 終三行】釈尊は無盡意菩薩に答えられました。

〔佛身(ぶつしん)を以て得度(とくど)すべき者には、～佛身を現じて爲(ため)に法を説き〕「善男子よ。衆生に対して、仏の身を示すことによって悟らせるのがふさわしい者に対しては、觀世音菩薩は仏の身となって現われ、法を説きます。また縁覺の身となって現われることが適切な者に対

しては、縁覺の身となって現われます。同様に声聞の身となって現われるのがふさわしい者に対しては、声聞の身となって現われます」

【三聖身・さんしょうん】

【三六一頁 二行】『梵王（ほんのう）の身を以て得度（とくど）すべき者には、即（すなわ）ち梵王の身を現じて爲（ため）に法を説き』「梵天王（ほんてんのう）の身となって救うべき相手には、梵天王の身となって法を説きます。帝釈天（たいしゃくてん）の身となるのが適切であれば、帝釈天の身となり、自在天（じざいてん）の身となるのが最適であれば、自在天の身となり、大自在天（だいじざいてん）の身となるのがふさわしければ大自在天の身となり、天大將軍（てんだいしょうぐん）の身をもって救うのが良いとするならば、天大將軍の身を示し、毘沙門天（びしゃもんてん）の身を現わすことが最適であれば、毘沙門天の身となって法を説きます」

【六天身・ろくてんしん】

【三六一頁 終五行】『小王（しょうおう）の身を以て得度（とくど）すべき者には、即（すなわ）ち小王の身を現じて爲（ため）に法を説き』「小王（しょうおう）の姿をとって救うのがふさわしい者には、小王の身となって法を説き、富豪（ふごう）の身となって救うべき相手には、富豪の身となり、在家の知識人が適切であれば、在家の知識人の身を示し、役人の姿が最適であれば、役人の身となり、バラモンの身がふさわしい者にはバラモンの身となって法を説きます」

【五人身・ごにんしん】

【三六二頁 一行】『比丘・比丘尼・優婆塞（うばそく）・優婆夷（うはい）の身を以て得度（とくど）すべき者には、即（すなわ）ち比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の身を現じて爲（ため）に法を説き』「出家修行者、または在家修行者の男子または女子の身となることがふさわしい者に対しては、それぞれの身となって法を説き示します」

【四部衆身・しぶしゅしん】

【三六二頁 三行】「富豪や在家の知識人、役人やバラモンの学者などの妻の姿を示して救うことが適切であれば、それぞれの身となって法を説きます」

【四婦女身・しぶにょしん】

【三六二頁 四行】「男の子や女の子の身となって救うべき相手には、それぞれの姿となって法を説きます」

【二童身・にどうしん】

【三六二頁 六行】「天人や竜、夜叉（やしゅ）や鬼神の乾闥婆（けんたつば）、阿修羅（あしゅら）や迦楼羅（かるら）、緊那羅（きんなら）や摩睺羅伽（まごらが）、そして人間および人間以外のあらゆる生き物の形となって救うのがふさわしい者に対しては、それぞれの身となって法を説きます」

【八部身・はちぶしん】【人非人・にん ひにん】

【三六二頁 七行】「執金剛神（しゅうこんごうじん）の身となって救うべき相手には、すなわち執金剛神の身となって法を説きます」

【執金剛神・しゅうこんごうじん】

——（三聖身・六天身・五人身・四部衆身・四婦女身・二童身・八部身・執金剛神） **《三十三身》**

【**観世音菩薩は、『施無畏者・せむいしゃ／何事にも畏(おそ)れない大安心の境地を与える人』**】——

【三六二頁 終五行】「無尽意(むじんに) よ。観世音菩薩はこのような力を具えているため、様々な姿となってどんな場所でも自由自在に出現し、真の救われ・解脱(げだつ)へと導くのです。ですから皆さんは観世音菩薩を一心に敬い、供養しなければなりません。／『怖畏急難(ふいきゅうなん)の中に於て能(よ)く無畏(むい)を施す』」どんな危機・困難に際しても全く動揺せずに、不安を覚えな安定した精神力を観世音菩薩は皆さんに与えます。そのため娑婆世界では、観世音菩薩を『**施無畏者・せむいしゃ/何事にも畏れない大安心の境地を与える人**』と呼ぶのです」**【施無畏者・せむいしゃ】**

【**無尽意菩薩が観世音菩薩の徳分に感動して、『供養』を申し出る**】——

【三六二頁 終行】以上のことを伺い、感動した無尽意(むじんに)菩薩は、釈迦牟尼仏に申し上げました。

「世尊よ。私は今、観世音菩薩に供養を捧(ささ)げたいと存じます」

【三六三頁 一行】そういと無尽意菩薩は、宝石を連(つら)ねた百千両ともいう計りしれない価値を持つ大変高価な首飾りを首からはずして、／『仁者(にんしゃ)、此(こ)の法施の珍寶(ちんぼう)の瓔珞(ようらく)を受けたまえ』『法を説いていただいた感謝の布施でございます。どうぞお受け取りください』と観世音菩薩に首飾りを捧げたのでした。

【**観世音菩薩は無尽意菩薩の供養を断る**】——

【三六三頁 三行】しかし、観世音菩薩はそれをお受け取りになろうとしませんでした。

【三六三頁 四行】すると無尽意菩薩は、重ねて申し上げたのでした。

『仁者(にんしゃ)、我等を慰(あわれ)むが故(ゆえ)に此(こ)の瓔珞(ようらく)を受けたまえ』「観世音菩薩よ。どうか私をあわれたとお思いになって、この首飾りをお受け取りください」

【**釈尊は観世音菩薩に、供養を受けるよう勧める**】——

【三六三頁 四行】その時、釈尊は観世音菩薩に向かって仰せになりました。

「観世音菩薩よ。無尽意(むじんに)菩薩や男女の出家・在家の修行者たち、天人や鬼神、人間および人間以外の全ての者たちの心をくみ取って、その首飾りをお受け取りなさい」

【**観世音菩薩は無尽意菩薩の供養を受けるが、釈迦牟尼仏と多宝塔に二分**】——

【三六三頁 七行】それを伺った観世音菩薩は、生きとし生けるものすべての者たちの心をくみ取り、即座にその首飾りを受け取りました。

しかし観世音菩薩は、首飾りを受け取るとすぐさま／『分(わか)って二分(にぶん)と作(な)して一分(いちぶん)は釋迦牟尼佛に奉り、一分(いちぶん)は多寶佛塔に奉る。』**それを半分に分け、一つを釈迦牟尼仏へ、もう一つを多宝仏塔に捧げたのでした。**

【**観世音菩薩が供養を二分した理由を釈尊が説明**】——

【三六三頁 終四行】釈尊は、無尽意菩薩の方をかえりみて仰(おお)せられました。

『無盡意(むじんに)、觀世音菩薩は是(かく)の如き自在神力(じざいじんりき)あつて娑婆世界に遊ぶ。』「無盡意(むじんに)よ。これでわかったでしょう。觀世音菩薩のこのような**大本に感謝する『報恩の念』**こそが、娑婆世界における**自由自在の神通力の根源**なのです」

【無盡意菩薩が再び觀世音菩薩の「名前の由来」を、偈(げ)をもって問う】——

【(偈)三六三頁 終二行】すると**無盡意菩薩**は偈(げ)を用いて、『佛子何(なん)の因縁あつてか名(なづ)けて觀世音とする』「觀世音菩薩は、なぜ『觀世音』と名付けられたのでしょうか」と、その理由を再び釈迦牟尼仏にお尋ねしたのでした。

【觀世音菩薩の「名前の由来」を釈尊が答える】——

【(偈)三六三頁 終行】この問いに対して、**釈尊**は偈(げ)を用いてお答えになりました。

『汝(なんじ)觀音の行を聽(き)け善(よ)く諸(もろもろ)の方所(ほうしよ)に應(おう)ずる弘誓(ぐぜい)の深きこと海の如し劫(にう)を歷(ふ)とも思議せじ』「まず、觀世音菩薩の尊い力と、これまでの深い修行をしっかりと知らなければなりません。觀世音菩薩は、苦境にある人々をその場その場に應じた方法で救うという広大な誓願を立てたのでした。その誓いは海のように深く、人が劫(にう)という大変長い期間を費やして考えても、決して考えおよぶことはできません。觀世音菩薩はかつて千億を超える無数の仏のもとで教えを信受し、清淨(しょうじょう)な誓願(せいがん)を立てた大菩薩です。その**誓願が広大なるが故にそのすべてを説き尽すことはできません。**『我汝(われなんじ)が爲に略して説かん』」ですからその深い意味をわかりやすく要約して説くことにします」

【觀世音菩薩の無限の慈悲と一体となれば、

さまざまな『苦・我欲』から離れることができる】——

【(偈)三六四頁 三行】『名を聞き及び身を見心に念じて空(むな)しく過ぎざれば能(よ)く諸有(しよ)の苦を滅す』「觀世音菩薩の名を聞き、その姿を見て、觀世音菩薩を念ずる心を常に保つことができれば『觀世音菩薩普門品』で説かれている**教え／一切をありのままにとらえて、相手と一体となれば、人生の様々な変化や差別から生ずる全ての苦悩を滅することができます**」

【(偈)三六四頁 四行】①『煩惱から離れ、我執を無くす』『大(おお)なる火坑(かきよう)に推(お)し落されんに～火坑(かきよう)變(へん)じて池と成らん』「また火口のような火の穴に落とされたとしても、觀世音菩薩の救済力を一心に念ずるならば、その火口は、たちまちに涼しい池となります」

【(偈)三六四頁 六行】②『嫉妬・愚痴・修羅から救われる』『或(あるい)は巨海(こかい)に漂流(ひょうりゅう)して龍・魚(ご)・諸鬼(しよき)の難あらんに～波浪(はろう)も没(もつ)すること能(あた)わじ』「もし大海原で漂流し、竜や猛魚(もうぎょ)、鬼などから襲(おそ)われても、觀世音菩薩の力を念ずるならば、波にのまれて遭難(そうなん)することなどありません」

【(偈)三六四頁 七行】③『増上慢ではない絶対的な自信』『或(あるい)は須彌(しゆみ)の峯に在(あ)って人に推(お)し墮(おと)されんに～日(ひ)の如くにして虚空(こくう)に住せん』「あるいはこの世で一番高い山・須彌山(しゆみせん)の頂上に立ち、そこから突き落とされたとしても、觀世音菩薩の力

を念ずるならば、転落せずに、まるで太陽のように空中にとどまることができます」

【(偈)三六四頁 終五行】④《自身の弱い心(自分自身)に負けない》(『或(あるい)は悪人に逐(お)われて 金剛山(こんごうせん)より墮落(だらく)せんに～一毛(いちもう)をも損(そん)ずること能(あた)わじ』)「また悪人に追われて金剛山から滑(すべ)り落ちかけても、観世音菩薩の力を念ずれば、何一つ盗まれず、また、かすり傷一つ負うこともありません」

【(偈)三六四頁 終三行】⑤《貪欲が静まる》(『或(あるい)は怨賊(おんぞく)の繞(かこ)んで 各(おのおの)刀(つるぎ)を執(と)つて害を加うる～咸(ことごと)く即(すなわ)ち慈心(じしん)を起(おこ)さん』)「あるいは盗賊に取り囲まれて刀で切りつけられようとしても、観世音菩薩の力を念ずるならば、盗賊たちは慈悲心を起こして何一つ害を加えようとはしません」

【(偈)三六四頁 終二行】⑥《我(我執)を抑える》(『或(あるい)は王難(おうなん)の苦に遭(お)うて 刑(つみ)せらるるに臨んで～刀(つるぎ)尋(つ)いで段段(だんだん)に壞(お)れなん』)「また残虐(ざんぎやく)な暴君(ほうくん)に捕(とら)えられて処刑されようとしても、観世音菩薩の力を念ずれば、振り上げた刀がバラバラになり、助かることになります」

【(偈)三六五頁 一行】⑦《心の束縛から放たれる》(『或(あるい)は枷鎖(かき)に囚禁(しゅうきん)せられて 手足(しゅそく)に扭械(ちゅうかい)を被(こうむ)らん～釋然(しゃくねん)として解脱することを得ん』)「あるいは投獄(とうごく)され、手かせ・足かせをはめられても、観世音菩薩の力を念ずれば、その拘束(こうそく)からスリリと抜け出せます」

【(偈)三六五頁 二行】⑧《誘惑に負けない》(『呪詛(しゅそ)諸(もろもろ)の毒藥に 身を害せんと欲せられん者～還(かえ)って本人に著(つ)きなん』)「また人から呪(のろ)われ、害を受けることがあっても、観世音菩薩の力を念ずるならば、それから逃(のが)れて、反対に、呪うその本人が害を受けることになります」

【(偈)三六五頁 四行】⑨《邪悪な思想に惑わされない》(『或(あるい)は惡羅刹(あくらせつ) 毒龍(どくりゅう)・諸鬼(しよき)等に遇(あ)わんに～時に悉(ことごと)く敢(あえ)て害せじ』)「あるいは悪鬼や毒を持った竜などに出会っても、観世音菩薩の力を念ずるならば、一切の害を受けることはありません」

【(偈)三六五頁 五行】⑩《本能の衝動にかられない》(『若(も)しは惡獸(あくじゅう) 圍繞(いにょう)して 利(と)き牙爪(げそう)の怖(おそ)るべきに～疾(と)く無邊(むへん)の方(ほう)に走りなん』)「また猛獸(もうじゅう)が取り囲み、牙(きば)を剥(む)き出して襲(おそ)って来ても、観世音菩薩の力を念ずれば、猛獸たちはたちまちに逃げ行きます」

【(偈)三六五頁 六行】⑪《ささやかな煩惱さえも消えていく》(『毒蛇(がんじゃ)及び蝮蠍(ふつかつ) 氣毒(けどく)煙火(えんか)の燃(も)ゆるがごとくならんに～聲(こえ)に尋(つ)いで自(おのずか)ら回(かえ)り去らん』)「マムシ、サソリなどが毒気を火を吹くよう襲いかかって来ても、観世音菩薩の力を念じ唱(とな)えるならば、その声を聞いただけで逃げ去って行きます」

【(偈)三六五頁 終五行】⑫《我執が静まる》(『雲雷(うんらい)鼓(く)掣電(せいでん)し 電(あられ)を降らし大(おおい)なる雨を澍(そそ)がんに～時に應(おう)じて消散(しょうさん)することを得ん』)「あるいは黒雲(くうん)が満ちて雷が鳴り響き、雹(ひょう)や霰(あられ)、そして豪雨に見舞われても、観世音菩薩の力を念ずるならば、たちまちに天空は晴れ渡っていきます」

【(偈)三六五頁 終四】/【經典二八頁 二行】**⑬《あらゆる困難をはね返す》**『衆生困厄(こんやく)を被(こうむ)って無量の苦身(くみ)を逼(せ)めんに観音妙智の力能(よ)く世間の苦を救う』「衆生が様々な苦に喘(あえ)いで苦しむことがあっても、観世音菩薩の偉大な力は、それらの苦しみを取り除き、救い切るであります」

【(偈)三六五頁 終三行】/【經典二八頁 三行】**⑭《自由自在の力を得て・透徹した智慧を具える》**『神通力を具足(ぐそく)し廣(ひろ)く智の方便を修して十方の諸(もろもろ)の國土に刹(はつ)として身を現ぜざることなし』

「観世音菩薩は神通力と偉大な方便力を具(そな)えているため、必要があれば、どのような世界にも現われます。たとえそれが荊(いはら)の道であっても、さまざまな身を現わして救いの手を差し伸べるのです」
——【普門示現・ふもんじげん】

【(偈)三六五頁 終行】/【經典二八頁 五行】**⑮《苦が苦でなくなる》**『種種(しゅじゅ)の諸(もろもろ)の惡趣(あくしゅ)～以て漸(ようや)く悉(ことごと)く滅(めつ)せしむ』「観世音菩薩は、人々を地獄・餓鬼・畜生・修羅の『四惡趣・しあくしゅ』の世界、『生老病死』の苦から、ことごとく救い出します」

【(偈)三六六頁 一行】/【經典二八頁 終二行】『真觀・清淨觀・廣大智慧觀・悲觀及び慈觀あり 常に願ひ常に瞻仰(せんごう)すべし』「観世音菩薩は、眞実を正しく見極(みきわ)め『真觀・しんかん』、迷いのない清らかな眼(まなこ)を具えており『清淨觀・しょうじょうかん』、万物をすべて一体と見ることができて『廣大智慧觀・こうだいちえかん』、苦しみ悩むあらゆる人を救い切るという慈悲の眼(まなこ)を持ち『悲觀・ひかん』、すべての者を幸せにするという慈(いつく)しみに満ちた眼(まなこ)を具(そな)えています『慈觀・じかん』。そのために、人々はこれらの眼(まなこ)を常に持つということを誓願し、そうした観世音菩薩を尊いお手本として仰(あお)ぎ見なければなりません」
——【五 觀】

【(偈)三六六頁 二行】/【經典二八頁 終行】『無垢清淨(むくしょうじょう)の光あつて～世間を照らす』「観世音菩薩の全身から清淨(しょうじょう)な光を放ち、智慧は太陽の如く一切の闇を払(はら)い、世の熱風を治(おさ)めて全ての不幸を打ち滅ぼします。そして世界を普(あまね)く明るく照らし出すのです」

【(偈)三六六頁 三行】/【經典二九頁 二行】『悲體(ひたい)の戒(かい)雷震(らいしん)のごとく』「人々の苦しみを取り除きたいという優しいお心は体全体に満ち、慈悲から発する『戒めの教え』『悲体の戒』は、雷鳴(らいめい)のごとく人々の心に響きわたり、／『慈意の妙大雲のごとく 甘露(かんろ)の法雨(ほうう)を澍(そそ)ぎ煩惱(ぼんのう)の焰(ほのお)を滅除(めつじょ)す』人々を救い切るという慈(いつく)しみの心『慈意の妙』は、世界を覆(おお)う大きな慈雲(じうん)のようで、甘露(かんろ)の雨を降り注いで人々の煩惱の炎を消し去るのであります」

【(偈)三六六頁 四行】/【經典二九頁 四行】**⑯《我執が消え去り、慈悲の心と寛容の精神が生まれる》**『訴訟(じゅうしゅう)して官處(かんじょ)を經(へ) 軍陣(ぐんじん)の中に怖畏(ふい)せんに～衆(もろもろ)の怨(あだ)悉(ことごと)く退散(たいさん)せん』「訴訟(そしゅう)で裁(さば)かれても解決せず、力づくで戦いを挑(い)どまれても、全てが解決して忌(い)まわしいことは消え去って行きます」

【(偈)三六六頁 六行】/【(經)二九頁 終二行】「觀世音菩薩は真理の言葉を述べる人で『妙音』、世の人々のあらゆる願いを聞き分け『觀世音』、教えを説く声はこの上なく清らかで『梵音・ほんのん』、その教えは海鳥(うみな)りが海底に響きわたるように、あらゆる人々の心に染(し)み入り『海潮音・かいちょうおん』、この世の全ての苦しみを打ち負かすものです『勝彼世間音・しょうひせけんおん』。それゆえ常に觀世音菩薩を心から念じていなければなりません」**【五妙音】**

【(偈)三六六頁 七行】/【(經)二九頁 終行】**釈尊**は言葉を続けます。觀世音菩薩のことをほんの一念でも疑ってはなりません。／『觀世音淨聖(かんぜおんじょうじょう)は、苦惱・死厄(くのうしやく)に於て、能(よ)く爲(ため)に依怙(えこ)と作(な)れり』)觀世音菩薩はこの上なく清らかな身であり、あらゆる苦悩に直面した際、眞の拠(よ)り所となる帰依の対象であります」

【(偈)三六六頁 八行】/【(經)三〇頁 二行】『慈眼(じげん)をもって衆生を視(み)る 福聚の海無量なり 是(こ)の故に頂禮(ちやうらい)すべし』)「觀世音菩薩は、全ての徳を具(そな)え、偉大な慈悲の眼(まなこ)で衆生を見る大菩薩です。それはあたかもすべての川が海に聚(あつ)まるように、無量の福が集まる大切な拠(よ)り所・帰依の対象となる菩薩なのです」

【持地(じち)菩薩(地蔵菩薩)が觀世音菩薩の徳分に感激。

多くの聴衆が仏智を得ることを決意】——

【三六六頁 終四行】するとこの説法を伺(うかが)って感動した持地(じち)菩薩(地蔵菩薩の異名)は、法会(ほうえ)の座から立ち上がり、仏さまの御前(みまえ)に進み出て申し上げました。

【三六六頁 終四行】「世尊よ。もしある人が、觀世音菩薩の大徳(だいとく)、すなわち、どんな相手にもさまざまな姿を変えて、どのような場面にも現われるという觀世音菩薩の神通力を知ったならば、その人の得る功德は、決して少なくありません」

【三六六頁 終二行】こうして『觀世音菩薩普門品』が説かれると、／『衆中(しゅちゅう)の八萬四千の衆生、皆(みな)無等等(むとうとう)の阿耨多羅三藐三菩提の心を發(おこ)しき』)八万四千の聴衆たちは、ほかに比較できないほどの尊い仏の智慧を得たいという強い誓願を起こしたのでありました。



すく げんり 救いの原理

(P18・1行／P11・2行)

救いというものは、私たちといつ如何なる時でも共にいてくださる久遠実成の本仏を、私たちが『確固(かっこ)として自覚する』ところに生まれます。～ そうした確固たる自覚があつてこそ、はじめて深い心の安らぎが得られるからです。～ ひとりでに仏さまのみ心、すなわち真理と一致してくるからです。

しゅうきょう ほんぎ 宗教の本義はひとつ

(P23・終2行/P14・終3行)

(本当に世界中の人々が幸福になるためには、～人間の外側にあるものではなく、外側にも内側にも。宇宙の至る所にくまなく満ち満ちている『普遍的な真理』に救われなければならないのです)

正しい宗教・信仰である限り、その奥の奥には共通の真理があるはずです。～ ギリギリの一致点があるはずです。～ (私が) 〈宗教協力〉ということの主唱(しゅしょう)しているのは、こういう理念(あらゆる宗教の本義は一つであり、そのことを世界じゅうの人の波長が共通になれば、世界は一つになれる)に基づくものです。～ すべての宗教の本義をきわめ、そこにある普遍(ふへん)の真理をつかむことができれば、個々の信仰もその意義もよく分かってきて、その信仰が本当に生きてくるのです。

かんぜおんぼさつ 観世音菩薩とは

(P27・1行/P16・終4行)

観世音菩薩はどんな徳をもっておられるのでしょうか。～ それはアヴァローキタ(梵語・ほんご)という言葉から出たものであることがわかります。アヴァローキタとは「見/見る」、「所見・しよけん/見られる」、「現見・げんけん/現わし(て)見せる」、「観見・かんけん/念入りに見る、すべてを見つくる」、「瞻仰・せんごう/仰ぎ見て尊ぶ」、「所観察・しよかんさつ/つまびらかに見られる」という意味です。～ (観世音菩薩)このような意味のすべてを具えたお方であります。

おと み 音を観る

(P28・終4行/P17・終2行)

『観世音』というのは、〈世の中の音を明らかにつまびらかに観(みる)』という意味です。音を聞くのではなく、音を観(みる)となっていてところに、大変奥深い意義があります。『聞く』というのは受動的(受け身)な、そして大変狭い知覚作用です。～ それに対して『観る』というのは、能動的(すんで他へはたらきかけるすがた)であり、そして非常に広大な知覚作用であります。～ そういうわけで、観世音菩薩は世間の音をただジッと聞いておられるというのではなく、進んで積極的に観察しておられるのです。～ 『世音(せおん)』というのは、生きて動いている世の中のすがたということになります。～ 人間の声・ことばという大切な意味があるのです。人間が心の中でどんなことを願っているか、祈っているか、その声なきことばまでも、観世音菩薩はすっかり聞きとってくださるというわけです。

しゆい 《思惟のひととき ①》

私たちが人の話を聞く時、いろいろな心が動いて話を聞いています。好感を持っている人ならば、「相手の言い分をよく聞こう」と思いますし、反対に嫌いな人に対しては「一体、何を言っているんだ」という聞き方をすることがあります。

ところが観世音菩薩は、相手が「どんなことを祈り、願っているか、その声なき言葉を聞き取る」ことをされます。観世音菩薩のような聞き方をすることは大変難しいと思いますが、それに至るためには、「何をすること」が大切だと思いますか？ 考えてみましょう。

観世音菩薩は真実の智慧の象徴

(P30・終5行/P19・3行)

観世音菩薩は〈世の中のすべてのものごとを見通し、見尽(みつく)し、どこにでも現われて人々に見られ、仰ぎ尊ばれる〉菩薩・・・ という意味です。これは何を象徴しているかと言えば、それは〈真実の智慧〉にほかならないのです。

三 諦

(P31・1行/P19・7行)

天台の教学では、観世音菩薩は『中諦・ちゅうたい』を本体としているのだと言っています。「諦」とは《真理・真理の悟り》の意味ですが、諸法実相を三つの立場から説いたものを示します。

【空諦・くたい】— あらゆる存在は絶対的な存在ではなく、すべては「空」ただ一つであるという見方。

【仮諦・けたい】— すべての存在は実体がないもので、それは《因と縁の和合》によって仮に現われているものと見て、現実を現実として観る。

(現われた現象をそのままの現象として観じ、その現象のあらわれは、それ以上でもなければ、それ以下でもない。)

【中諦・ちゅうたい】— 空にもとらわれず、仮(け)にもとらわれずに、一切の出来事を《ありのまま》に捉える見方。空と仮とが渾然(こんぜん)と融合(ゆうごう)したところに諸法実相の捉(とら)えどころがあるという見方。または〈中道〉ともいう。

※『諸法如實の相を觀じ、亦(また)不分別を行ぜざる。是れを菩薩摩訶薩の行處と名く』

(『安樂行品』二四一頁 終二行)

観世音菩薩を念ずるとは

(P37・5行/P23・終5行)

《本仏に感応(かんのう)する》 久遠本仏と感応(かんのう)する道をひらくこと。

《観世音菩薩のようになりたい》 観世音菩薩のようになりたいという憧れを持つこと。

『観世音菩薩の名を持つことあらん者は』 (三五七頁 七行) (P53・4行/P34・終2行)

「観世音菩薩の名を持つ(たも)つ」⇒ 観世音菩薩の無限の『智慧』と一体となり、その無限の『慈悲』と一体になるのです。

『観世音菩薩の名を称(しょう)せば』 (三五八頁 一行) (P68・終4行/P45・7行)

「観世音菩薩の名を称(とな)える人」⇒ 真理(妙法)を説く人。本当の意味の人生の教師であります。そういう人が衆(しゅう)のなかにいて『中諦の智慧』に基づいて『人生いかに生きるべきか』を説いて聞かせるならば、人々は魔に魅(み)せられたりする危機から救われるのであります。

火 難 ①(「七難の第一」)

(P53・終3行/P35・3行)

煩惱の炎—— 火というものは、～ 煩惱の炎というもの。～ 大火というのは、人間の煩惱を意味している。(P60・6行/P39・終7行)

水 難 ②(「七難の第二」)

(P63・終5行/P41・終5行)

人は欲に溺(おぼ)れる。～ 人間の心は大変弱いもの。外からやってくる誘惑に押し流されるのです。～ サンズイ「シ」に「弱い」と書いて「溺・でき」。(P64・2行/P42・1行)

風 難 ③(「七難の第三」)

(P66・終2行/P44・3行)

人生の目的を指している。～ (逆風・暴風に見舞われ、目的の港に達せられぬどころか、羅刹・らせつの国に吹き寄せられ、さまざまな悪に心を魅(み)せられて墮落(だらく)することは、実際に至るところで起っている。—— 目的を見失う) これを風難というわけです。(P67・終行/P44・終2行)

剣 難 ④(「七難の第四」)

(P69・終3行/P46・4行)

心を切られる—— 大切なのは『心を切られるか切られないか』という問題なのであります。憎悪(そうお)に切られ、嫉妬(しと)に切られ、侮辱(ぶじよく)に切られ、猜疑(さいぎ)に切られて、己の心を傷つけないかが問題なのであります。～

(以上のような切られることが あったとしても)観世音菩薩の本体である大慈・大悲と真実の智慧とに心をかよわせ、一心にそれを念ずれば、それらの刀杖(とうじょう)がどんなに振りかかってこようと、心が傷つけられることはありません。なぜならば、真実の智慧より強いものは無いからです。～ (真実に基づく大自信が心を支えているために)打ちひしがれることもなく、傷つけられることもなく、悠然(ゆうぜん)としておられるのです。(P71・1行/P47・2行)

鬼 難 ⑤(「七難の第五」)

(P73・終5行/P49・2行)

邪悪(じゃあく)なものにとりつかれて、自分を見失う—— 正気を失う人。誤った信仰に入って中道を踏みはずす人。よこしまな思想にかられて極端に走る人。～ 真理を知り、真理をしっかりと心に保持している者に対しては、邪悪なものがとりつくことはできないという意味であります。(P74・終3行/P49・終3行)

これは「心の自由を束縛(そくばく)するもの」を指(さ)しているのです。～

理想社会においては束縛が少しも束縛と感じられないのです。(町を歩いていても歩行者は歩道を歩くという交通法規を束縛とは感じない)～ 心の自由を持っておれば～ 何ものにも縛(しば)られない気持ちでおられるのです。～ 心の自由というのは大切なものなのですが、おおかたの人間がそれを獲得することを忘れています。そして〈自分で自分を縛っている〉のです。金のある者は金に縛(しば)られ、地位のある者は地位に縛られ、名誉のある者は名誉に縛られ、～ 本当の人間らしい行ないを知らず知らずのうちに自分で抑えつけているのです。～

心の自由自在こそ、自他共に幸福にするものであり、人間最大の喜びであります。完全にそのような境地に到達することが、人間の究極の目的なのであります。そして、それを完成した人を、〈仏〉というのであります。(P77・終3行/P52・1行)

《患(わづ)のひととき ②》

理想社会では、束縛(そくばく)が少しも束縛と感じません。～ 心の自由を持っておれば、たとえば「人間は歩道を通らなければならない」という束縛を受けていても、束縛とは感じません。心の自由を得て、そのような境地に到達することが人間の究極の目的であり、それを完成した人を〈仏〉というのです。と庭野開祖は説きます。

—— この説示をあなたは、どのように受け止めますか。そして日ごろ自分で自分を縛っている、何かに縛られていることはないか？ 振り返ってみましょう。

つみ 罪は包み

(P80・2行/P53・終5行)

罪という言葉は、〈つみ＝包み〉から転化したものだといわれています。～ 仏性を迷いによって包んでしまうことを〈つみ〉というのです。本来の仏性を包み隠(かく)して、発揮させないことが、罪なのです。～ 真実の智慧に帰依しさえすれば、内から自分を縛(しば)っていたあらゆる迷いも、外から自分を縛(しば)っていた世間の悪条件も、即座に消えてなくなってしまうのは、理の当然であります。

これは人生行路(じんせいこうろ)の上に現われる様々な「苦難」をいいます。盗賊はこちらがどんなに正しい生活をしていようと、向こうから襲(おそ)ってくるのだから、どうにも仕方ありません。～ この『観世音菩薩の名を唱(とな)えなさい』というのは、つまり「中諦(一切の出来事をありのままに捉える)の観(み)かたに心を向けなさい」という意味です。「現象の上に起こっている現象に惑わされてハラハラする気持ちを静めて、実相に目を向けなさい」ということなのです。そうすれば、今起こっている苦難などは、いわば大海の表面に立つさざ波のようなものだということ、ひとりでに分かってくるのです。(P86・終5行/P58・7行)

苦難くなん かいめん なみは海面の波のようなもの

(P87・3行/P58・終4行)

「波」というものは、元々(もともと)実体のないもので、風その他の原因によって水の表面に生じた仮の動きにほかならないのです。ですからその原因が無くなれば、すぐに消滅してしまうものなのです。また、表面にはいくら波が騒(さわ)いでいても、海の底のほうは常にどっしりと落ち着いた、静かな世界があります。

「苦難」などというものも、それに直面している人にはそれが実在するもののよう感じ取られるために、恐れおののくのですけれども、じつは海の波と同じで、実体はないのです。～

「あると思えばある。無いと思えば無い。あるように見えるのは、因と縁が合ってそういう現象が現われているにすぎないのだから、やがてその因縁が無くなれば、消え去ってしまうものだ」
(こういうふうに達観できれば、恐怖などはどこかへ吹っ飛んでいくわけです)

貪とん

(P90・3行/P61・2行)

欲望をつい貪欲(とんよく)にまで増大させるから、自らも悩み、人をも不幸にし、世の秩序をも乱すことになるのです。それゆえ中諦(ちゅうたい)を本体とする観世音菩薩を心に念ずれば、自然に帰らざるを得ないわけです。

瞋じん

(P93・3行/P63・4行)

瞋恚(しんに)というのは、小我(しょうが)のために怒る、小さな怒りです。～ 我にとらわれているために怒(おこ)るのです。

欲望をつい貪欲(とんよく)にまで増大させるから、自らも悩み、人をも不幸にし、世の秩序をも乱すことになるのです。それゆえ中諦(ちゅうたい)を本体とする観世音菩薩を心に念ずれば、自然に帰らざるを得ないわけです。

痴ち

(P98・終4行/P67・1行)

愚痴(ぐち)というのは愚かなことです。～ 〈**本当の意味の智慧がないもの**〉という意味です。

ぐちひと 愚痴の人とは

(P99・終3行／P67・終4行)

「愚痴」というのは、「真理を知らず」、「知ろうともしない」ことを言います。本能の衝動(しょうどう)のままに行動し、ことの是非(せひ) 善悪を考えようとしないことを言います。～ 自分の立場がわからず、あとさきの考えもない愚かさを言います。

「愚痴の人間」とは――

(P185・5行／P131・終3行)

- ①自分のすることがおよそどんな結果を生み、周囲にどんな影響を及ぼすかを、考えようとしない人間です。(後先を考えない人)
- ②自分がこの世の中でだいたいどんな位置を占めているのか、どんな役目を持っているのか、それがわからない人間です。(自分が置かれている立場が見えない人)
- ③人を愛し、人と調和することの快(こころよ)さ、その次元の高い喜びを知らない人間を言います。(人と和することの喜びを知らない人)

したがって、この反対の人間が、本当の意味で<智慧のある人間>というものです。

(後先を考え、自分の立場を知り、人と和すること大事にする人)

『便(すなわ)ち福德・智慧の男を生まん』 (三五九頁 終三行)

『便(すなわ)ち端正有相の女の宿徳本を植えて衆人に愛敬せらるるを生まん』

(三五九頁 終二行)

なんちえしょうちよう 〈男〉は智慧の象徴

(P104・終4行／P71・5行)

によしょうちよう 〈女〉は慈悲の象徴

(P106・6行／P72・終4行)

にぐりようがん 二求両願をかなえる

(P109・1行／P74・4行)

「智慧」と「慈悲」の二徳を求めるものは、観世音菩薩を礼拝・供養することによって、それがかなえられることを説かれているのです。～

〈男〉の子が欲しいと願うならば、福德(ふくとく)円満・豊かな人格の感化力・智慧を具えた男子とあり、〈女〉の子を願うと、顔立ちが美しく(身なりが整い)、そして前世において積んだ徳分によって多くの人々から愛され敬われ、そして慈悲深い女の子を生むであります。とあります。

(観世音菩薩は、それぞれに「最高の男子」「最高の女子」を授けるというのですから、これを見方を変えて言うならば、

※「最高の男性」とは、福德円満で・豊かな人格の感化力・智慧(本能の衝動にかられない)を具えた人であり、

※「最高の女性」とは、身なりが整い、多くの人々から愛され敬われ、そして慈悲深い人を指し示しているといえます)

《^{しゆい}思惟のひととき ③》

※『最高の男性』とは、福德円満・豊かな人格の感化力・智慧(本能の衝動にかられない)を具えた人であり、※『最高の女性』とは、顔立ちが美しく、多くの人々から愛され敬われ、慈悲深い人を示しているといえます。—— では私は男性として、または女性として、以上の徳目をどれほど具えているか？ また、どのようにしたら、何を行うことによってそうした徳目を、さらに高めることができるか？ かみ締めてみましょう。

^{さんじゅうさんしん} 三十三身

(P126・6行/P89・5行)

観世音菩薩は、〈三聖身さんしょうしん〉・〈六天身ろくてんしん〉・〈五人身ごにんしん〉・〈四部衆身しぶしゅしん〉・〈四婦女身しぶによしん〉・〈二童身にどうしん〉・〈八部身はちぶしん〉・〈執金剛身しゅうこんごうしん〉という三十三種の身となって現われ、あらゆる衆生を教化するというのです。

^{ふもんじげん} 普門示現

(P126・終2行/P89・終5行)

救う相手にふさわしい如何なる姿でも、とって現われたもうのであって、あらゆる衆生を平等に慈しみ、しかもそれぞれの人を救うためには、それぞれの人にふさわしい身となって示現されることを【普門示現】といいます。【大悲代受苦・だいひだいじゅく】と共に、観世音菩薩が持つ二つの大きな徳の一つとされているのであります。～

われわれの周囲には、必ず観世音菩薩がおられます。それゆえ、われわれもまた観世音菩薩にならなければ、申し訳ないのです。受ける恩恵(おんけい)だけ受けて、与える方は知らぬ顔というのでは、人間らしい人間ではありません。 (P130・終2行/P92・6行)

^{せむいしや} 施無畏者

(P133・終2行/P94・終5行)

観世音菩薩は〈何ごとも恐るることのない精神力〉を人々に施す方です。なぜ施無畏者(せむいしや)なのか。～ 真実の智慧を知れば、恐れるものはなくなってしまいます。真実の智慧に随順(すいじゆん)すれば、危機に際しても動揺(どうよう)することはないのです。

^{だいひだいじゅく} 大悲代受苦

(P168・1行/P119・8行)

(先の〈普門示現〉と合わせて) 観世音菩薩の二大徳目の一つ。すべての衆生の苦しみを一切引き受けようという願い。一切衆生の苦しみをどこまでも代受(だいじゅ・代わりに受ける)しつつ、この世にただの一人でも苦しみ悩む者がいる限り、自分は成仏しないという、自己犠牲に徹した精神。

(ご本尊を心から真剣に拝(おか)み、念ずることによって本尊の御心(みこころ)そのものに溶け込み、それほど強烈に念ずれば) もはや自分というものはなくなってしまう。自分を幸福にしてもらおうとか、自分が立派になろうとか、そんな<小我(しょうが)>の気持ちがさっぱりなくなってしまう。そういう状態を<無我>というのです。～ そのような境地になれば、もはや自分もその本尊と同じように天地いっぱい広がってしまったことになります。～ これこそ、宗教的な悟りの極致(きよくち)といわなければなりません。

《患(わづ)のひととき ④》

幸福にしてもらおうとか、自分が立派になろうとか、<小我(しょうが)>の気持ちではない<無我>の境地になってご本尊に向き合い拝めば、もはや自分も本尊と溶(と)け込み、本尊と同じように天地いっぱい広がってしまったことになります。～ これこそ、宗教的な悟りの極致(きよくち)といわなければなりません。と庭野開祖は説きます。

—— では私が本尊に手を合わせ、念じ、拝むとき、どのような気持ちで手を合わせているのでしょうか。振り返ってみましょう。

観世音菩薩と一体となれば、その本体である<中諦・ちゅうたい>でものごとを観(み) ることができるようになります。～ 具体的にいうならば、凡夫の身として普通の生活をしながらも①宇宙の根本道理を悟り、②すべての人が平等に持っている仏性の尊厳さを見出し、しかも、③その一人ひとりの個性と立場に即した、理解と愛情に満ちた態度で接していくことができるわけです。つまり、自分が観世音菩薩になるわけでありませう。

『衆生困厄を被(こうむ)って 無量の苦身を逼(せま)めんに 観音妙智の力(ちから) 能く世間の苦を救う』
(三六五頁 終四行/【経典】二八頁 二行)

智慧がフツと湧(わ) いてくるならば、その苦しみをたちまちはね返(かへ)すことができます。このはね返(かへ)すということが人生にとって非常に大切であって、『はね返(かへ)す力』を持つ者は、どんな困難をも乗り越えることができます。～ (困難を乗り越るか、打ちひしがれるか) その分かれ道は、本当に紙一重です。～ 『智慧』ある人ははね返(かへ)すことができます。気力の充実した人は、はね返(かへ)すことができます。～ そこに『信仰』のありがたさがあるのです。～ <信仰心によってなんとか立ち上がり、立ち直る>～ このなんとかというところに、真の智慧のはたらきの至妙(しみょう) さがあるのです。

くなん せいちょう かに 苦難を成長の糧とする

(P223・終2行/P159・2行)

苦難をはね返すことのできる人は、その苦難から何ものかをつかむことができます。その苦難を成長の糧(かて)として、人間的に伸びていくことができます。『禍(わざわい)を転じて福となす』、こういうところに、くめども尽きぬ人生の妙味(みょうみ)があるのです。

《しゆい 惟のひととき ⑤》

なんとか苦難をはね返せるところに『信仰の有り難さ』があります。そして「なんとか」苦難をはね返すことのできた人は、その苦難を人間的成長の糧(かて)とすることができます。と庭野開祖は説いています。—— これまでの人生の中で、『信仰の有り難さ・智慧』によって、「なんとか」苦難をはね返す経験があったのでしょうか？ この「なんとか」はね返せたという「なんとか」とは、一体何だったのでしょか？ また、その苦難を「人間的成長の糧(かて)」とすることができたか？ 振り返ってみましょう。

くがくでなくなる

(P231・終4行/P164・7行)

この『苦が苦でなくなる』ということが、観世音菩薩の本体である『中諦(ちゅうたい)を知る』功德の、最も著(いちじ)しいものであるということができましよう。『信仰の功德』の一番現実的なもの、ということができなのです。

く 苦のつきるときはない

(P233・4行/P165・8行)

(「死」に対する苦をはじめ、苦から逃れることは、絶対不可能) 一体どうすればよいのでしょうか。道はただ一つしかありません。苦を苦としないようにすればよいのです。～これが苦を克服(こくふく)できる唯一の道なのです。

《第一》に、「人生は苦である」(苦が常態である)と悟ること。(普通の人、楽がはつうの状態であって、苦が異常な状態であると思っています)。「人生は苦である」と悟り。苦と正面から向き合うことで、たいていの苦は向こうからスーッとしぼんでしまうものです。

《第二》に、「苦という実体はないのだ」と見極めること。これは《第一》の「人生は苦である」の悟りより、もうひとつ境地の進んだ悟りです。この世は全て『空』。すべからく「原因」と、それを助長する条件である「縁」との結びつきで、「現象」として現われるもの。これを『縁起の法則』『因縁の法則』といいます。「苦」もその大原則にはずれるものではありません。「苦」は、人間がそう感ずるだけのものであって、あたかも幻のように、実体はないものです。

ただ、「苦という実体はないのだ」という、そこまでの悟りを徹底させる人は、よほどの達人です。そこで私たちは、「精神の大革命」「心の改造」を行なわなければなりません。『空』に徹し、「苦の実体はないのだ」という悟りに達しなければならないのです。

そうぞうかつどう 創造活動によって苦を超える

(P240・5行/P170・2行)

すべての人が、今からすぐ実行できる、「大乘的な救いの道」があります。それは『創造活動によって一切の苦を超えてしまう』ということです。～（苦が苦でなくなる方法）そんなうまい方法があるのでしょうか。あります。すべての人が、いますぐ実行できる、大乘的な救いの道があります。それは〈創造活動によって一切の苦を超えてしまう〉ということです。～ すべての創造活動は、必ず苦しみを伴います。～ 常に何ものかを創造していくというのはたゞきは、本仏の心そのまま合致するものであり、～ 〈創造活動によって一切の苦を超えてしまう〉というのはこの理（ことわり）の活用です。創造的な仕事と取り組み、その苦しみと格闘し、苦しみのなかにひそむ喜びに魅（み）せられているうちは、ほかの苦しみは苦にならなくなってしまいます。

ひとの幸福への奉仕は最高の創造活動

(P242・終4行/P171・終5行)

さらに一歩進んで他の人のしあわせを作るために何らかの活動をするならば、これが最高の創造活動です。～ 心から人のため世のための奉仕活動に打ち込む人は、苦の中にあって苦を知らず、常に喜びに満ち、最高の価値ある人間として生きることができるのです。～ その人自身が観世音菩薩になったわけであります。

ご かん 五 観

(P246・1行/P174・1行)

真観 ⇒ 清浄観 ⇒ 広大智慧観 ⇒ 悲観 ⇒ 慈観

この五観はそれぞれ独立したものではなく、真観から清浄観へ、清浄観から広大智慧観へと、必然的な筋道の通った、一貫した世界観・人生観です。

《愚惟のひととき ⑥》

真観・清浄観・広大智慧観・悲観・慈観。この五観はそれぞれ独立したものではなく、真観から清浄観へ、清浄観から広大智慧観へと、必然的な筋道の通った（流れとして）、一貫した世界観・人生観です。と庭野開祖は説きます。—— この教えを、かみ締めてみましょう。

むくしょうじょう ひかり えにちもろもろ やみ は よ さい ふう か ぶく あまね あきら
『無垢清浄の光 あって慧日 諸 の闇を破し 能く災の風火を伏して 普く明かに

せけん て
世間を照らす』 (三六六頁 二行)

智慧はあたかも太陽の如く全ての迷いの闇を破り、諸々（もろもろ）の不幸を打ち滅ぼし、普く世の中全体を明るく照らすものであります。—— その身からは常に汚（けが）れのない〈無垢・むく〉、そして〈無我〉に澄（す）み切っている〈清浄〉の光が放たれます。いつも後光がさしているのです。

ひたい かいらいしん じ い みょうだいうん かんろ ほう う そぞ ぼんのう ほのお めつじょ
『悲體の戒雷震のごとく 慈意の妙大雲のごとく 甘露の法雨を澍ぎ煩惱の焰を滅除す』

(三六六頁 三行)

観世音菩薩が説く戒めは、衆生の苦しみを抜くという愛情に基づくものであるから、その力はまるで雷鳴(らいめい)が打ち震(ふる)えるように鳴り響いて甚大(じんたい)で、慈悲の心『慈意の妙』は大地を覆(おお)う大雲(だいうん)のごとく大きく包み込み、甘露(かんろ)を普(あまね)く降り注いで、煩惱の炎を消してくれるのです。

ひ 悲に 発した 戒め

(P254・5行／P180・1行)

観世音菩薩の戒めは、ひたすら人間の苦しみを取り除いてあげたいという〈悲〉の心に発しているのです。〈悲〉が体(すかた)となってあらわれた〈戒(かい)〉です。それが〈悲體の戒・ひたいのかい〉の意味です。(その〈戒〉が雷震のごとく鳴り響くのです)

ご みょうおん 五妙音

(P261・終3行／P185・7行)

みょうおんかんぜおんぼんのんかいちようおん しょう ひ せけん のん こ ゆえ すべか つね ねん
『妙音観世音梵音海潮音 勝彼世間音あり 是の故に須らく常に念ずべし』(三六六頁 六行)

観世音菩薩は真理(『妙音』)を説き、世の人間の願い(『観世音』)を明らかに聞き分け、その教えは清らか(『梵音・ぼんのん』)で、そこに説かれる教えはも海鳴(うみな)りのように人々の胸に染(しる)み入り(『海潮音・かいちようおん』)、そしてその教えは、世間の全ての迷いと苦しみを打ち負かして(『勝彼世間音・しょうひせけん のん』)くれる菩薩であります。ですから常に観世音菩薩を心から念じていなければならないのです。

な たも もの 名を持つことあらん者は

(P268・1行／P189・終3行)

『観世音菩薩の名を持つ(たも)つことあらん者』。この〈聞く〉⇒〈称する〉⇒〈持つ・たもつ〉ということには、信仰の深まって行く順序が示されています。 ～ ①仏教の教えを〈聞く〉のが、信仰に入る第一歩です。そしてその教えを②一心に、身と心にしみこませる行。〈一心称名・いっしんしょうみょう〉するのです。これによってはじめて、仏・菩薩の徳と一体になることができるのです。こうして③その境地をいつも持ち続けるように精進する。それが〈持つ・たもつ〉であります。

じげん しゅじょう み ふくじゅ うみわりょう
『慈眼をもって衆生を視る 福聚の海無量なり 是(こ)の故に頂禮(ちやうらい)すべし』

(三六六頁 八行)

観世音菩薩は、偉大な慈悲の眼(まなこ)で衆生を見る大菩薩です。それはあたかもすべての川が海に聚(あつ)まるように、無量の福が集まる大切な拠(よ)り所・帰依の対象となる菩薩なのです。

かんぜおんぼさつ いったい
観世音菩薩と一体になる

(P274・終4行／P195・2行)

第一に、我々自身が『観世音菩薩』にならなければならない。観世音菩薩と一体になる。

第二に、いやしくも指導的立場に立つ者は、観世音菩薩のように人々の心の声を洞察(どうさつ)し、その人にふさわしい進路を発見して、自由自在に指導できる。

第三に、苦しみ悩んでいる相手の身代わりになるほどの徹底的な慈悲心を持つこと。

第四に、観世音菩薩は、平和な、包容力に満ちた優しく、温かい人格の象徴。如何なる困難・争い・邪心(じゃしん)もたちまち消え去って行くことができる。

第五に、観世音菩薩の智慧・徳・神通力を持った境地は、我々の目標。そのためには釈尊の教え・妙法にしたがって、怠(なま)けることなく、退転(たいてん)することなく、修行精進する。

以上が、この品の真意であり、よくよく理解していただけたことと思います。

《**患(しゆい)惟(い)のひととき ⑦**》

『観世音菩薩普門品』の真意は、①我々が観世音菩薩と一体となる。②指導的立場に立つ者は、人々の心の声を聞き取り、自由自在に指導できる。③相手の身代わりになるほどの徹底した慈悲心。④包容力に満ち、優しく温かい人柄。⑤智慧と徳が具わるよう怠(なま)けることなく精進する。ということを中心に受け止めることだと庭野開祖は説きます。

—— 私の信仰姿勢は、以上の5項目と照らし合わせて、如何でしょうか？ 振り返ってみましょう。

《**患(しゆい)惟(い)のふいかえり まとめ**》

今日の『観世音菩薩普門品第二十五』の学びを通して、何を学び取ったか？

(または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか？) 振り返ってみましょう。

以 上